

みんなで作る学校安全

金澤 良（岩倉高等学校 養護教諭）

1. はじめに

近年、学校現場における安全で安心な環境の確保について、様々な問題が取り上げられ、国全体で取り組みが推進されています。「学校安全」は①生活安全②交通安全③災害安全の3つの領域があり、「安全管理」と「安全教育」、それらを円滑に進めるための「組織活動」と多様な活動内容が求められています。本稿では「安全管理」である、主に生活安全における危機管理として取り組んでいる「物」「場所」「行動」「情報」の整備と生徒一人一人の危機管理意識を高めるために取り組んできた啓発方法について紹介します。さらに、「安全教育」として、体制整備と共に筆者が実践している生徒保健委員会を中心とした体育的行事の救護所の運営や日常の健康教育の実践例を紹介します。これは、子どもたちが「自らの身体の主体者は自分」であることに気づき、「学校安全にかかわる当事者の一人」であるという意識を持つことをねらいとしており、自己管理能力育成につながる個々の危機管理としての取り組みです。

2. 誰でも出会う救急対応の場面

学校組織には救急対応に関する専門知識と技術を身につけた養護教諭がいる保健室があります。しかし、事故が起きた日や時間帯に必ずしも養護教諭がいるとは限りません。以下（スライド1.2）に示すように、学校では養護教諭の不在時やすぐ駆けつけられないような場所などで、教職員や生徒が事故現場に遭遇する可能性があります。筆者は、養護教諭が不在であっても、現場に居合わせた教職員や生徒達が落ち着いて行動し対応ができること、さらには教職員や生徒が予測できる事故に対し予防的にかかわる力を身につけられるような体制整備や啓発活動が必要と考えています。



（スライド1）

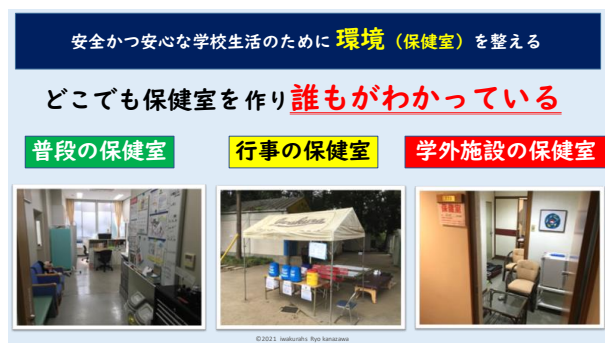


（スライド2）

3. 学校の環境と体制を整える

① 環境を整える

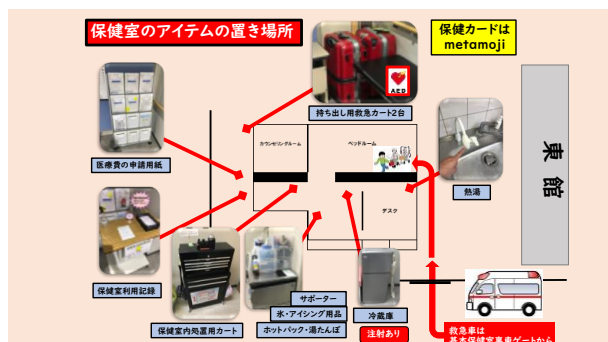
本校ではまず、救急対応ができる「場所の整備」を行いました。つまり学校内には「いつでもどこにでも保健室がある」ということです。通常の保健室はもちろんのこと、体育祭や球技大会など学校外での行事や修学旅行などの宿泊行事でも、いつも「保健室」と看板を掲げ、誰もが一目で救急対応の拠点を把握できるようにしています（スライド3）。



（スライド3）

② 物を調える

次は「物（救急用品）」の整備です。本校の保健室は養護教諭が不在でも、教職員が誰でも鍵を開けて利用できるように救急用品の置き場所を図に表して可視化しています（スライド4）。



（スライド4）

また、学校外で設営する場合でも、なるべくいつもと同じ保健室を再現できるように、通常使用している救急用品のミニチュア版を赤いカートに入れ、保健室前の廊下に常設しています。この赤いカートは被災時や緊急対応時に誰でも持ち出すことができる「ミニ保健室」として活用することをイメージしてください。このカートがあるおかげで「いつもの物」で「いつもの対応」が可能となるため、救助者の安心にもつながります（スライド5）。



（スライド5）

③ 行動を整える

次に、「行動の整備」です。場所を確保し、道具があっても、行動できなければ意味がありません。本校では毎年の校務分掌に合わせた緊急時行動計画（EAP：Emergency Action Plan）を作成しています。EAPは大きく分けて3種類の作成パターンがあり、このEAPを事前に作成し周知しています（スライド6）。



（スライド6）

- ① 普段の学校生活での EAP
- ② 体育祭や遠足などの学校外行事用の EAP
- ③ 各クラブ合宿などで作成する EAP

この EAP の情報を本校では IWAKURASAFETY と呼んでいます。

IWAKURA SAFETY の内容

- ・ 連絡系統
- ・ 緊急時の必要アイテムの設置場所
- ・ 緊急搬送、受診の連携協力先情報（スライド7）
- ・ 救急車要請の際に伝える内容
- ・ 緊急時の救急車入場口の案内図

IWAKURASAFETY は教職員の活動拠点となる職員室や各体育施設の管理室などのホワイトボードに掲示してあります。この準備をすることによって、何かあったらホワイトボードの前に来て必要な情報をピックアップすることを可能にしています。



（スライド7）

④ 情報を整理する

最後に「情報の整備」です。生徒が教室の中で急にけいれんしながら倒れた時や、アナフィラキシーショックを起こした時、その場に居合わせた教職員や生徒

は動揺し、教室中がパニックしてしまいます。しかし、その倒れた生徒が「過去に3回のてんかん発作の経験あり、抗てんかん薬を内服中」「エピペン®をカバンの外ポーチに入れています」などという情報が予め教職員間で共有されていれば、もしもの時の対応に落ち着いて判断でき、内容によっては対応することも可能です。本校では既往症や過去に配慮すべき事項があった生徒は、年度初めの職員会議で全教職員に顔写真付きでその内容を情報共有し、事前に対応方針を決めています（スライド8、9）。さらに、本人と保護者の希望があれば養護教諭が年度初めのホームルームの時間にクラスメイトへ情報共有することで、対象生徒が万が一の時に、クラス全体が対応できるような協力体制を構築することを教育の一環として進めています。



(スライド8)



(スライド9)

4. 生徒を守る力

体制を整えてもいざとなると混乱して計画通りに行動できなくなるのが人間です。また、人が危機に遭遇する確率は低く、生徒も教職員も当事者意識が低くなってしまうのが現実です。そういった問題を少しでも解消するために、本校ではインストラクター制度を設け、教職員には毎年1回、必ずEAPと要配慮者リストの確認、心肺蘇生とエピペン®の注射訓練を行って

います。毎月2人ずつ5グループに分けて少人数制の安全点検を行います（スライド10）。

安全点検の内容（スライド10）

- AEDの本物の電源を入れる
- 注射器（エピペン®など）の保管場所と対象者情報の確認
- 心臓マッサージ 100回
- エピペン®注射訓練
- 要配慮者（スライド8、9）の確認

安全点検

『1年に1回だけ安全点検をお願いします』



(スライド10)

5. 自分たちを守る力

「学校安全」において何よりも大切なことは生徒達が自分たちで安全を確保していける力です。学校教育はその力を育成する役目も担っています。本校では保健委員会を中心に、学校安全につながるあらゆる場面で生徒たちが主体的に関わる機会を作り、「自分たちのことを自分たちで守る力」を育成しています。もちろんすべての活動を養護教諭の管理下に置きますが、ケガの応急処置はもちろんのこと、来室した生徒の健康問題への対応を一緒に考えながら関わっています（スライド11—13）。

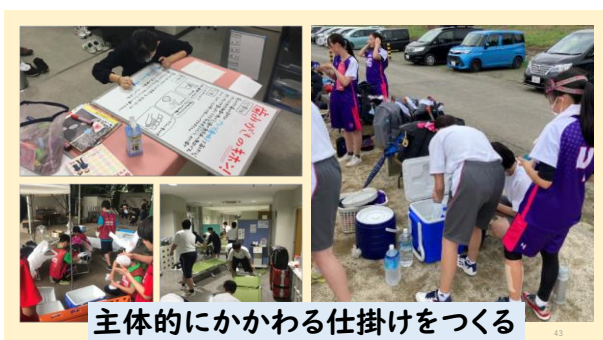
生徒たちは保健の教科書で学んだ知識をもとに、委員会や保健室での活動を通して、「知っている」から「やったことがある」を経て、「できる」力を身につけていきます。こうした活動を通して学年や部活を超えた交流が始まり、自分たちで支えあっているという感覚が生まれ、自己効力感も育まれていくと考えられます。

保健委員の主な活動

- ・ 日常の体調不良者の保健室引率と問診補助
- ・ 体育祭や球技大会などの体育的行事の保健室（救護所）運営
- ・ 文化祭食品団体の食品衛生管理
- ・ 感染症流行時の教室消毒
- ・ 年に1度の啓発ボード作り など



(スライド 11)：球技大会の救護所運営



(スライド 12)：クラブごとの活動場所



(スライド 13)：日常の保健室

6. おわりに

本校は「仲間と共に学び、考え、創造し、行動して
いける人材を育てる」という教育目標を掲げ、生徒の
主体的な活動を大切にしています。筆者はここまで述

べたように生徒も教職員も、保護者も地域も、みんな
で学校の安全を考え、行動する活動に取り組んできま
した（スライド 14）。その中で気づいたことは、学校
安全への関わり方に決まったマニュアルはないとい
うことです。例えば、本校では感染症拡大予防の啓発
のために放送部は昼休みの放送で、保健委員は消毒活
動で関わります。熱中症対策期間には鉄道模型部の生
徒が大型扇風機を組み立て、環境づくりに貢献し、保
健委員は環境測定や水分補給の啓発に関わります。全
校生徒 1300 人が外部の体育館を借りて体育祭を行
うときの会場入場誘導には防災委員会に関わります。

活動を始めた当初は、筆者一人が直接対応したり予
防したりすることだけに意識が向きがちでした。しか
し、安全は多くの人の目と手でづくり、確保できるも
のであることに気づき、組織的に取り組むべきこと、
その組織を整備することが重要であるとわかりまし
た。

学校という組織の「安全管理」や「安全教育」の全
体像を理解したうえで、自分たち一人一人ができるこ
とを考え、関わることで「学校安全」は成立するとい
えます。そう考えた時、筆者は「学校組織における養
護教諭は、いつも安全と安心という側面から学校全体
を見ている唯一の存在であり、生徒や保護者、教職員
の声を聞きながら、みんながうまくいくようにリード
していける人」でいなければならないと思うになり
ました。未来の社会をつくる生徒たちが「自らの身
体の主体者は自分」であることに気づき、「学校安全
に関わる当事者の一人」であるという意識を持てるよ
うな教育活動に今後も取り組んでいきたいと考えてい
ます。今回紹介したのは取り組みのほんの一例です
が、何かのヒントになれば幸いです。



(スライド 14) 職域接種ボランティアの風景